

劇あそびの脚本

麴町區富士見幼稚園 山村 ぎよ

〔其の四〕 「不思議なお人形」

（一幕一景）

（十分）
〔お雛祭用女兒全體にて〕

（登場人物）

お店の主人 二名

買 手 三名

人形（いろ〜）

イ、日本人形……………二

ロ、西洋人形……………二

ハ、キュービー等……………五

各人形は適當に

幕開くとお店にいろ〜の人形が腰かけてゐるその前でお店の主人等話し合つてゐる

主A「もうぢきお雛祭よ」

主B「そうねこのお家でもお雛様やお人形さんをおかざりしてあるわね」

主A「私達のお店へもお客様が御見えになるわ」

主B「お店をきれいにしておきませうよ」

主A「え〜」 二人でお人形やお店のお掃除を始める

客A「買ひ」

に來る

客A「ごめん下さい」

主A「いらつしやいませ」

客A「お人形を見せて下さいな」

主B「ごうぞ」 椅子をすゝめる、客坐る（腰かける）客B買ひに來る

來る

客B「ごめん下さい」

主A「あら、いらつしやい」

客B「お人形さんを見せて下さいな」

主B「ごうぞ」 椅子をすゝめる、客腰かける 客C買ひに來る

客C「ごめん下さい」

主A「あら又お客様よ いらつしやいませ」

二人で 客C「お人形さんを見せて下さいな」

主B「ごうぞ」 椅子をすゝめる 坐る

主A「一番始めにおぎりの上手な日本人形をお目にかけてま

すわ」

主B「お人形さん上手におぎつて頂戴ね」 人形うなづく二人

で日本人形を正面につれ出す踊り(さくらさくら) 其の他適當に

客一同「まあお上手だこゝ」拍手

主A「こんごは西洋人形がダンスをします」

主B「お人形さんお上手にね」 人形うなづく二人で正面へつれ出す、ダンス二回遊戯(おじぎ)其の他適當に

客一同「まあお上手だこゝ」

主A「今度はキュービーチャンの番よ」

主B「さあ皆さんでうたつて上げませう」 うなづきつゝ両手指をひろげたまゝ正面にならぶ(二人で位置をなほす)(キュービーチャンハダカンゴ)の遊ぎ一番だけ唄ひおどる

客三人「まあお上手だこゝ」 拍手

主A「一番始めのお客様はよろしいでせうか」

客A「私日本人形にするわ、大きい方はおいくら?」

主B「五圓です。さあさうぞ」 客A金を渡して人形を一人つれ去る

主A客Bに向つて

主A「あなたはそれがよろしいですか」

客B「こちらの西洋人形にませう、おいくらですか」

主B「三圓です。さあさうぞ」 客Bお金をわたしてつれ去る

主A「あなたはそれ」

客C「私一番向ふのキュービーさんがいゝわ、おいくら」

主B「一圓です。さあさうぞ」 客C金を渡してつれ去る

主A「ずいぶんうれたわね。」

主B「えゝ今度はお家のお人形さん達でおうたのおけいこをませう」 お雛様の唱歌一回歌ひ終る頃

客Aさつきの人形をつれて大急ぎでくる(あわて)

客A「ごめん下さい」

主A「あらさつきのお客様よ」

主B「さうしたの」

客A「お家へかへつたらこのお人形さんがおざりをおざりなくなつてしまつたのよ」

主A「あらあなた、お人形さんにおやつあげるのを忘れたでせう」

客A「あゝほんま、忘れたわ早くかへつておやつにしませう」

客A人形をつれかへるとB客人形をつれてくる

客B「ごめん下さい、ごめん下さい」

主A「あら又さつきのお客様よ」

主B「さうしたの」

客B「このお人形さんお家へかへつたらダンスをしなくなつてしまつたのよ」

主A「あらあなたもおやつをあげるのを忘れたでせう」

主B「お人形さんおながすいたのね」 人形うなづく

客B「あゝそうくすつかり忘れでるたわ、早くかへつてお

やつにしませう」人形をつれかへるとすぐ客Cキュービ

ーをつれて来る

主A「あらまたさつきのお客様よ」

主B「さうさうしたの」

客C「このキュービーさん、お家へかへつたらお手々もあんな

よも一寸もうごかなくなつてしまつたのよ」

主A「あらあなたもキュービーさんにおやつあげるのを忘

れたんでせう」

主B「きつこそうよ、キュービーさんお腹がすいたのね」

客C「あらほんま……早くかへつておやつにしませう」

キュービーをつれ去る

主二人「まあおかし忘れんぼのお客様達ね」

主二人「お家のお人形さんもおやつにしませうね

一同大きくうなづく

幕

終り

(其の五) 春の神様 (二幕四景) (十五分) (年長組男女兒合同)

(登上人物) (時) ある日の朝から

子供……………四人

サル……………四

ウサギ……………四

熊……………三

鹿……………三

狸……………三

春の神様……………一

その子供……………二

春風……………二

お花……………八

蝶……………二

序 (幕の中で保姆が話す)

寒い、風袋をしようつた北風のおぢさんも遠い、お園へ行つてしまひましたもうぢきあた、かい春風を一ぱい袋に入れた春風のおばさんがやつて來ますそうするとあのきれいな櫻のお花がさくんです櫻のお花が咲く頃には僕たちは……私達は一年生になるんです

春風の叔母さんはどこからくるんでせうか櫻のお花はだれがさかせて下さるんでせうね

(第一景) 靜かに幕あく

子供二人歌を唄ひながら(適當な歌)登上舞臺を一廻りした頃正
面をむく

A「ねえB子さん」

B「なあにA子さん」

A「私達もうぢき一年生になれるわね」

B「え、そうよ私今度の日曜日ランドセル買つて戴くのよ」

A「私も……早く一年生になりたいわ」

B「でも櫻のお花が咲く頃にならなければ一年生になれないのよ」

A「ほんま……あのきれいなお花誰がさかせて下さるんでせうね」

B「春の神様ぢやない?」

A「そうよ、きつこさうよ」

B「ねえA子さん二人で春の神様お迎へにゆきませうよ」

A「え、それがいゝわ」

二人肩をくんで歌を唄ひながら退場

(歌) 春よこひ早く來い、お家の前の櫻の木つぼみもみ
んなふくらんで、はよさきたいを待つてゐる。

二人又唄ひつゝ登上二人の子供に行き逢ふ。

男兒「A子ちゃんさB子ちゃんさこへゆくの」
二人

女兒「春の神様お迎へにゆくよ」

男兒「なぜ」

女兒「だつて私達早く一年生になりたいんですもの」

男兒「あ、そうかぢやあ僕達も一諸にゆくよ」

二人
四人で唄ひながら退場(春よこひ……暮……)

(第二景)

幕あくと同時に「森の水車」のレコード前の方のみかけて小鳥のなき聲をきかせるうさぎがびよん／＼はねて來る(ピアノ)でリズムを取る)

適當の曲でおどる子供四人唄ひながら登上うさぎを見てとまる

女A「あらうさぎさんよ」

女B「うさぎさん達ここから來たの」

ウザギ「向ふのお山から」

男A「春の神様知らない」

男B「教へてよ」

ウザギ「お山を一つびよんさきんで行つてごらん」

退退場

子供「さうもあがたう」

唄ひながら(春よこひ)退場 スキップでおさる登上おさるを見て、

女A「あらおさるさん達が晝寝をしてゐるわ」

女B「きいて見ませう」

四人で「おさるさん、おさるおさる」

男A「春の神様知らない」

おさる「お山を一つびよんここえて行つてごらん」 スキッ

プでおさる退場

四人「ごうもありがたう」

唄ひながら舞臺を大きく一廻りする頃熊登上

女A「あつ……くまさんよ」

女B「きいて見ませう」

男A「春の神様知らない？」

熊「お山を一つびよんここえて行つてごらん」

四人「ごうもありがたう」

四人唄ひつゝ(春よこひ)退場

熊「皆をよんでいつものおさりをおさうよ」 四方へ向つて

呼びかける

熊「オーイ〜」

兎、狸、鹿、猿等それらの様子をしながら登場曲に合はせて
輪になる

一同遊戯(すべりつこ)

つるり〜つらら……

つるり〜つらら……

雪の凍つた月夜の晩に

山の熊さん兎さん

猿さん鹿さん狸さん

皆揃つてすべりつこ

おさり終ると一同前の様な様子をしながら退場、レコードで小鳥の聲、四人の子供つかれた様子をして登場

女A「私つかれてしまつたわ」

女B「私も」

男A「ずいぶんお山を澤山こえて来たね」

男B「僕はねむくなつちやつた」

女二人「こゝで少し休みませう」 一同ねむる

レコード(メンデルソーンの途中まで)

レコードにあわせて春風舞臺を舞ひまわる (春風が退場してか

らレコード止む)二人目をさまし

男A「あつ、さてもあたゝかくなつたよ」 女児二人も目をさ

まして

女A「あら、向ふの方が明るくなつて来たわ」 一同とんで行

く

春の神様お供をしたがへてきれいな籠を持つて登場

(色紙をきつた花ふぶきを入れる)

四人「春の神様今日は」

神「あなた方はどこからいらつしやつたの」

女A「お山のお山の向ふから」

女B「春の神様お迎へに來たのよ」

男A「早く櫻の花をさかせて下さい」

神様「さうして」

男B「早く一年生になり度いから」

神「それではお花を咲かせてあげませうね」

櫻のお花春ですよ、お山において春ですよ、お庭にお出で春ですよ。と三回に言ひながらお供の者と一緒に花ふぶきをまくと

同時にお花の子供登上、二人づゝでお花を造つてしやがむ

女A「まあきれいな」

男二人「きれいだなあ」

神様「櫻のお花さん達さあ踊つて頂戴」

適當な踊り一回して又元の場所にしやがむと二匹の蝶登上その間を舞ふ

(レコードその他適當の曲) 舞つてゐる處で

—— 靜かに幕 ——

附

昨年五月から私のつまらぬ經驗發表をつゞけさせていたゞきました、この他「のらくろ」、「小鳥の學校」、「お花と蝶」等年少組用のものも短いお話のある一つのテーマを取つて造つて見ました、紙面にもかぎりのある事と存じまづ筆を止める事といたし

ます、以上のべましたものについてどうぞ御遠慮なく御批評なり御意見なりお聞かせ下さいませ様お願ひ申上げます。

(昭和十四年一月)

(三六頁より)

もう直ぐお正月です。風や羽子板なども出來ました。寒くなつても、皆小さい人も、遠い處の人も元氣で來ますことを嬉しく思ひます。時には泣いて來ることもありますけれど。お辨當の時は、熱くて持てない程に燻まつた御飯を頂けるのがうれしいことです。ラジエーターの上の箱の中に御飯だけ入れて煖めて居ります。漸くスケート場に水を注れ始めました。

北の方はどんなに寒いでせう。でも皆元氣でスケートに、橇遊びに此の冬を樂んで居るのです。南の瓦房にも愈々其の時が來ました。

十二月十三日

附、これをお記していた頃は十二月十日前後で、まだお寒くなりきらぬ時であつた様でございます。

東京でさへびり／＼するやうな今日この頃の酷寒、瓦房店のお寒さを遙かに想像いたして居ります。

(編輯部)